

# 金田一少年の友人救済

スターゲイザー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔犬の森の殺人事件の犯人は金田一の幼馴染である千家貴司。金田一の幼馴染である彼ならば事件を起こす前に話す可能性があるのでないか、という着想から始まったミステリーのない優しい世界である。

◇話が進むごとにタグ追加

# 目次

魔犬の森殺人事件	1
番外編・剣持警部の殺人	10
雪影村殺人事件	19
狐火流し殺人事件	30

## 魔犬の森殺人事件

千家貴司の誤算はただ一人の人間が付いて来てしまったことにあ  
る。

「おい、八尾。さつきから大分歩いているけど、家一軒見当たらないっ  
てどういうこと!？」

原因不明の火事によって別荘を燃やされた八尾徹平に文句を言っ  
ているのは、千家の幼馴染である金田一である。

(なんで金田一がやってくるんだよ!?)

今日になって本来ならば付いて来ないはずの金田一が冴子をトイ  
レに閉じ込めて代わりにやってきた。これは完全に千家の計画には  
なかったことだ。

(これじゃアイツらを殺せない。くそっ、こんなに予定が狂うなんて)  
元はカラオケで仲良くなった女の子と八尾鉄平の別荘でキノコ狩  
りを名目に、とある殺人計画を実行に移すはずだった。

女の子が急に来れなくなって、代わりに七瀬美雪が来ることも、ハ  
ブにされた金田一がやってくることも千家の計画にはなかったこと  
だ。

(いいや、大丈夫。あれだけ準備したんだ。幾ら金田一だって)  
入念に画策して、何度も何度も穴はないかと確認した殺人計画であ  
る。

如何な金田一でも解けるはずはないが懸念がある。

(ないが、金田一ならもしかして)

金田一が名探偵・金田一耕助の孫であることも、金田一自身も表沙  
汰にはなっていないが数多くの事件を解決して来たことを千家は良  
く知っている。

与えられた情報量に差はあれど、千家には毛ほども分からなかった  
首つり学園殺人事件を見事に推理して犯人を捕まえたのは他ならな  
い金田一だ。

復讐さえ遂げることが出来れば捕まっても構わない、という想いは

千家にある。

千家が何人も殺す事件を起こせば、警察も重い腰を上げて動機を解明するだろうから、例え殺しきれなくても奴らは裁かれる。

(でも、金田一に友達を捕まえさせていいのか?)

少なくとも千家と金田一が共に過ごした年月は、七瀬美雪を除けば付き合いは一番長い。

あれで友情に厚い金田一はきっとショックを受けるだろうし、心に大きな傷を負うだろう。それは千家の望むところではない。

「ううん、ここは元々ダムの下に沈むはずの村だったからな。でも、ダムの計画が中止になって残った農家の空き家を親父が買い取ったんだ」

そう考えれば、元から別荘を壊して泊まれなくなる予定だった八尾にも悪い気がしてきた。

彼は完全な善意で千家を別荘に誘ってくれたのに、利用して殺人を行ったのだと知ったら一生ものの心の傷が残るだろう。

「でも、どうするの? このままじゃ私達は野宿しなきゃ……」

ライトを持って先導するのは千家だから自然と主導権を握ることが出来る。

人を何人も殺す計画を立てて実行に移すと決めた時から抑え込んでいた後ろめたさがズススキと千家を刺激してくる。

「ん? 向こうで何か光ったような」

「人が住んでる家があるかもしれない。行ってみよう」

悩んでいても千家の口は金田一が指し示した方を見て自然と動き、ライトを握って主導権があることで自然と目的の場所へと誘導してしまう。

演技が出来る、でも罪悪感はどんどん増していく。

「な、なんだこりゃ?」

これから千家を作るケルベロスの檻は、罪を犯そうとしている千家をこそ食い殺そうとせんばかりに風の音が唸り声のように響き渡った。

隠し扉の向こうにあった動物の骨の入ったケージだらけの場所から出た金田一は千家に呼び止められて別の場所へに移動していた。(まさかケルベロスが怖いから一緒に寝てほしいなんて言わないだろうな)

幼馴染が話があるとわざわざ皆がいない場所に連れてきたことに嫌な想像が頭を過る金田一。

「改まってどうした千家？ 顔真っ青だぞ」

しかも顔色が真っ青なので、探検で見つけたケージに骨がなかったケルベロスに怯えているのだろうかと思つた金田一は少し嫌な顔をしながら軽口を叩く。

「言つとくが俺は美雪以外とは一緒に寝ないぞ」

「……………誰が言うかよ」

千家はようやく笑つたかと思えば直ぐに口を閉じる。

流石に様子がおかしいと思つた金田一には思い当たる節があつた。

「おい、本当にどうしたんだよ。もしかして今頃、キノコの」

「金田一——俺、人を殺そうと思つてるんだ」

副作用が、と言おうとした金田一の言葉を遮って、もう我慢なんて出来なかつた千家は想いをぶちまけた。

「は？ 何言つてんだよ、千家」

始め、金田一は千家が冗談を言っているのだと思つた。

幼馴染である千家が人を殺せるような奴ではないことを良く知っているからこそ、冗談であると思つ先に思考が至る。そう、名探偵とはとても思えない思考の鈍りであつた。

「ここに来ていたオカルト研究会の萬屋、参道、百田、渡辺の四人を殺すつもりだ」

「おい、だから」

「俺は最初からイツらが山奥の建物で合宿することを知つていた」

冗談は止めろ、と信じようとしないう金田一が言おうとした言葉を封じる千家。

「でも、こんな所に一人でやって来たら怪しまれる。そこでこの近くに別荘を持つ八尾を利用した」

金田一に信じる気が無くとも、一度話し始めた千家の口は止まらない。

「八尾を誘って数人の友達と別荘に行き、最初から騒ぎに乗じてこの建物に向かうつもりだった。どうしてか火事になってしまったけど」偶然などではなく、ライトを持っていたのは千家だから誘導するのは容易い。金田一の頭脳は瞬間的にその事実に気付いてしまう。

「冗談きついで。どうしてお前が萬屋さん達を殺すんだよ」

「金田一——俺、少し前に好きな子が出来たんだ」

冗談のままに終わってしまった方がいい。そう思っていた金田一に対して千家は殺人を犯すに足る動機を話し始めた。

「利緒って言って、明るくて健気な子でさ」

そう言う千家の顔は今まで金田一が見たことがないほど穏やかだった。

「——でも去年、彼女は、利緒は死んだ。殺されたんだよ！」

そう言う千家の顔は今まで金田一が見たことがないほど憎悪に染まっていた。

「萬屋達のモルモツト実験動物にされて——っ!!」

もう金田一には千家が冗談を言っているとは思えなかった。

「助けてくれよ、金田一！ アイツらを殺せなきゃ憎しみで気が狂っちゃまいそうだ!!」

その懇願を断る理由が金田一にはなかった。

そして金田一は犯人無き事件に挑むことになる。しかし、決して挫けることは許されない。

何故ならこれは幼馴染を殺人者にしない為なのだから。



「感謝するぜ、剣持のおっさん、いつきさん」

一週間と少し経った後、平日の昼間のファミレスに学校をサボってやってきた金田一は目の前に座る二人の大人に深々と頭を下げた。

「よせやい、金田一。お前の真剣な頼みを俺が断るわけがないだろ」

そう、剣持は金田一が真面目に頼み込めば断ることはしない。

金田一が解決して来た事件の功績と何よりも彼との関わりから、頼みを大事なことでであると直感したことが大きい。

「俺も大きなスクープを得られたからな。感謝こそすれ、礼を言われることなんてねえよ」

いつきもまた金田一の頼みを全面的に受け入れて動いてくれた。

探偵として事件を解決して来た金田一を信用も信頼もしていて、今までいつきの方から多くの頼みごとをしてきたのだ。一回や二回、頼みごとをされたぐらいで感謝されては借りを返しきれない。

「いや、今回の刑事のおっさんと記者のいつきさんに調べてもらったのは完全に俺の私情だ」

金田一は改めて実感する、自分は人に恵まれていると。

子供の戯言と決めつけずに真摯に聞いてくれる大人がいることがどれだけ心強いのか、改めて思い知った。

「仕事もあるのに、こんな短期間に調べ上げてくれたんだ。金もない俺に出来るのはこれだけだから」

「いいっていいって。気にすんな。なあ」

「ああ、子供は大人に甘えてればいいんだからよ。ほら、頭を上げろつて」



感謝してもしきれない頭をようやく上げると、男達は男臭い笑みを浮かべて並んでいる。

世間的には恰好良いと言われるタイプではないかもしれないが、金田一はこういう大人になりたいと今思った。

「まあ、正直最初は眉唾だと思ったよ。それぐらいありえねえことだからな」

いつきが取材メモを取り出して、コーヒー以外は何も頼んでいないテーブルの上に広げる。

「萬屋、渡辺、百田、参道の四人がバイト先の病院で人を殺した可能性があるって聞いて俺なりに調べてみたら出るわ、出るわ。悪い噂ばかりだ」

メモを読むのも嫌なのか、顔を歪ませたいつきは煙草を取り出して火を点ける。

「大学では好き好んで付き合う奴の気が知れないってレベルで黒い噂がそこかしこに流れてるよ。例えば人体解剖の途中に切った耳を壁に付けて、壁に耳ありつてやって爆笑してたとかな」

「将来医者になる奴がすることかよ……」

実際に当人達に会ったことがある金田一はいけ好かない連中だとは思ったが、まさかそこまで異常なことをするとは考えもしていなかったので嫌悪感で胸が一杯だった。

「渡辺って奴は新薬作りに相当入れ込んで、自分で作った薬を後輩に飲ませてデータを取ってるなんて話もある」

「いつきも聞いた時は同じ気持ちだったが、その程度で終わる話ではないから始末が悪い。」

「それがまた結構な薬らしくて、無理やり飲まされた後輩の中には丸三日も痺れが取れなかった者もいるらしい」

「俺も同行してたんだが、何分直ぐに被害届を出さない事には罪には問えん」

剣持がいつきの話を継ぐ。

「令状は取れんから聞き込みが精一杯だが、当時病院に勤務していた看護婦から話を聞いたら俺が刑事だと分かったら素直に話してくれ

たよ」

そう言っつていつき同様に剣持も煙草を取り出したのは、でなければやっつていられないからだろう。

「彼女——水沢利緒さんを担当していたのは、ちゃんとした医者ではなく、まだ医師免許も持っていなかった医大生に過ぎなかった四人だったとな」

いつきが差し出したライターで煙草に火を点けた剣持は、胸いっばいに吸い込んで大量の紫煙を天井に向けて吐いた。

「それがあの四人か」

「ああ、萬屋達だ。奴らは萬屋の父親である院長に頼み込んで患者を一人借り受けたんだ、渡辺の作った薬の効果を調べる実験体として」  
自分であつたらと思うとゾツとする話である。いや、自分でなくても自分の知る者を診るのが医者ではなく、医大生なのだと思つたら絶対に病院に行かない。

「奴らはその薬の所為で水沢さんの容態が急変すると逃げるように大学に戻り、院長である萬屋の父親は手を回して病死にしまつたつて話だ。ああ、胸糞悪い」

数度で根元まで吸い切つた剣持が煙草を吸い殻に押し付ける。

「千家君の気持ちは俺も良く分かるよ。もしもカミさんが同じ目にあつたら俺だつて殺したくなる」

「行動に移す前に俺に言ってくれたんだ。強い奴だよ、千家は」

「ああ、金田一つていう良い友達を持ったもんな」

「よせよ」

想像した剣持が遠い目をして外を見て、場の空気を和ませる為にいつきが茶化す。

「まともな奴が念の為に取つていてくれたカルテのコピーも残つてた。証言もあるし十分に証拠もある。今頃、病院にも大学にも警察の手が入つてるだろう」

こうやって金田一に報告する必要もあつたのと、どうしても私情が入つてしまう剣持は敢えてそれ以上の捜査には加わらなかつた。

いつきと剣持で集めた情報と証拠は警察と検察に十分に活用され

るだろう。

「ありがとう、おっさん、いつきさん。二人じゃなきや、こんなに短時間に調べられなかった。これで千家も納得してくれるかな」

「法で裁かれるんだ。それに社会の罰も受ける」

納得してもらえないと大人の二人は言った。

罪として考えるなら一生を牢屋の中で過ごすということはないだろう。それこそ殺したいほど憎んでいた千家の憎悪に対して相応しい罰では多分ない。

「最低限、奴らの医者としての輝かしい未来が閉ざされるんだ。萬屋の父親も責任問題で病院を手放さざるをえないだろう。納得するしかないさ」

何時だつて損をするのは弱い者達、正しい者達だ。味わった痛みに相応しい罰が与えられるとは限らない。

「日本は法治国家だ。殺されたから殺しては認められないんだからな」

復讐を果たしても、待っているのは殺人者としての残りの人生だ。

「金田一、少なくともお前は千家君の未来を閉ざさなかった、護ることが出来たんだ。それは喜ぶべきことだぞ」

「おっさん……」

「後は本人に聞いてみな」

そう言っつていつきが立ち上がり、続いて剣持も立つ。

「え？」

「金田一、こんなところにいたのか」

「千家……」

去って行く剣持といつきと入れ替わるように、やってきた千家が金田一の前の席に座る。

「学校にもいないから探したぞ。駄目じゃないか、サボったら。また七瀬さんに怒られるぞ」

「サボりはここにいるお前もだろ」

「俺はちゃんと休むつて連絡入れているからいいんだよ」

「は？ セコいぞ、おい」

「利緒の墓に報告しておきたかったらさ」

一人だけサボリではないことに文句を言おうとしたが、そんなことを言われたら何も言えなくなる。

「——金田一に話せて良かったよ」

暫くの沈黙の後、千家がポツリと言った。

「一人で考え込んでいた時はさ、どうやって許し難いアイツらをこの手で殺すのかって頭が一杯になってた」

首に下げていた利緒の遺品だという犬笛を手に取った千家に憎しみの色は見えない。

「お前に相談してから利緒の気持ちを考えるようになった。そりゃ死んだ人の気持ちは分からない。でも、利緒は血生臭い復讐を望んでるのかって、この一週間ずっと考えた」

憑き物が落ちたかのように穏やかに笑う千家に金田一は泣きそうになった。

「怪我をした野良犬を世話するほど優しい子だったんだら。両手を血に染めたお前の姿を見たって喜んだりするわけねえよ」

「ああ、そうだな。本当にそんなことも考えられなかった」

そう言って千家は犬笛を握った手で顔を覆うように近づけた。

「利緒が死んだ後、俺は利緒の部屋で彼女の日記を見つけた。それには利緒が生きるはずだったこれからの半年が愛おしむ様に、噛み締めるように、一日一日書き綴ったあいつの未来の日記だったよ」

金田一的位置からでは千家が泣いているのかどうかは分からない。

「金田一のこと話してたから、創立祭で初めて会って緊張してドキドキしてしまう事になっていたよ」

萬屋達と関わるのがなければそうなっていたであろう出来事。

「会わせたかったなあ、金田一に」

「俺も会って見たかったよ、千家の彼女の利緒さんに」

金田一の中で何かが変わって行く。

## 番外編・剣持警部の殺人

いつきと別れて警視庁に戻った剣持勇は気になって仕方ない事件の資料を保管庫より運び出し、自分の机に並べた。

「うくん」

資料を見返しても捜査に明らかな不備は見当たらない。

見当たらないが、こうして資料を見返してみるとあの頃とは違って違和感を覚えるところが数か所あった。

「おや、少年事件のファイルですか？ 剣持警部」

一時間と少しかけて全部に目を通した剣持が資料を机に置き、疲れた目を休ませる為に目元を解していると後ろを通りがかった人物が資料の挟まれた写真を見て言った。

「ええ、明智警視。三年前の女子高生遺棄事件のファイルです」

若いながらも剣持の直属の上司であるキャリア組の明智健吾に説明した剣持は、彼が金田一に勝るとも劣らない頭脳の持ち主であることを思い出して助言を貰うべきかと迷う。

「あの事件なら私も覚えていますよ。かなり陰惨な事件でしたしね」

勝手に置いてあった資料を手取る明智。

別を取ってはいけないというわけではないのだが、一言ぐらいは断ってほしいものだと思いながらも何も言わない剣持。

「すると、この三人は犯人の少年達ですか」

「はい、ただ気になることがあって」

「気になることですか？」

剣持は自信があるわけではないと前置きをしながら違和感を感じたところを口にする。

「今更になって思うのですが、主犯とされた毒島は当初、聴取にだんまりを決め込んでいました」

そのこと自体は剣持も、当時の捜査一課も不審に思うようなことではない。

悪事を働いたとはいえ、子供が強面の大人と差し向って聴取を受ければ何も言えないことは珍しい事ではないし、仕出かした悪事の重さ

に今更ながらにショックを受けているということも往々にしてある。

資料の内、毒島の場所を流し読んだ明智は該当箇所を見つける。

「聴取では自白をしているとありますね」

「ええ、私が被害者である十神まりなが握っていたストラップを見せた途端に自白を始めました」

その時のことを思い返せば、ストラップを見せた途端に毒島は目を見開いて絶句していた。

「あの時は逃れられない証拠を前にして観念したのかと思っていました。だが……」

十神まりなは剣持の剣道の教え子で、家族ぐるみの付き合いがあった。

金田一が言っていた『これしかないという思い込みは思考と判断を狭める』という言葉を聞いて、最初から毒島を犯人と決めつけていたのではないかという考えが剣持の内に湧き上がった。

「違ったと？」

「共犯の二人の証言と犯行場所が毒島の部屋であったことは間違いありませんが、今更毒島のストラップを十神が握り締めていたことを教えたところで観念するでしょうか？」

証言や犯行場所以外の物的証拠の重みは子供であった毒島にも分かっただろうが、それまで沈黙していたのにいきなり自白するには唐突さがある。

「それほどに被害者に恨まれていたことにショックを受けたとも考えられるのですが」

「些か唐突な感じも否めないというわけですね」

物証まで出て来ては、これ以上は逃れられないと悟ったからこそ自白したとも取れるが、それならば証言と犯行場所が特定された時点で自白する方が自然ではある。

「それに毒島達の関係もおかしいんです」

当時は気にならなかったが改めて見直してみると違和感を感じた。

「毒島の父親は医療機器メーカーを営んでいましたが、多間木の家の病院の受注のお蔭でなんとか倒産しないような経営状況です」

毒島は学校に行きながら休みの日は父親の工場を手伝っているというのは、工場で働く者や父親の証言からも明らか。

成年近いとはいえ、高校の子供も手伝うほどに経営状況は決して良くなかった。

「成程、妙ですね」

少し聞いただけで剣持の違和感の原因に気付いた明智が眼鏡の位置を直す。

「家の関係は子供の関係にも影響を及ぼします。家の力関係を考えれば、毒島が多間木に犯行を強要することが出来るとは思えない」

「例外はあると心得ていますが、どうしても気になってしまつて」

「いえ、良い着眼点です」

そこで一度言葉を切つた明智は考えを纏めるように顔を上げる。

「多間木には自分のしたことを毒島に押し付けることが出来る力があつた。逆に家のことを手伝う毒島には多間木の要請を断れる立場にはない」

何事にも例外があるので、多間木が何をされても従うことしか出来ない小心者で、毒島は家のことも気にせず多間木に言うことを聞かせられる人間である可能性もある。

現実として、犯行の経緯を見ればその例外が適用されるのだが違和感はどうしても残る。

「剣持警部は毒島は多間木に罪を被らされたと？」

「いえ、そこまでは言いません。毒島には動機もありますから」

剣持が感じた違和感と違和感の範囲を脱していない。

「十神と関係があるのは、同級生だった毒島だけ。学校内で話している姿はなかつたようですが、事件前に十神がバイトしているファミレスで毒島と話している姿が多数に目撃されています。婚約者がいる十神に毒島が横恋慕して奪おうとして多間木達を協力させて犯行に及んだというのが当時の一課の見解です」

「しかし、毒島と多間木達の関係が逆であるならば話が変わってくる」「それでも邪な気持ちに突き動かされて多間木達を頼つたという線も無いわけではありません」

つまりは堂々巡りに陥ってしまうわけである。

奇妙な点を感じるものの、証言・物証・犯行現場の全てが毒島が犯行に関わっていることを示している。

「ただ、多間木と魚崎の証言を鵜呑みして、毒島が主犯だという先入観の下に思考と判断が狭まっていたのではないかという思いが抜けないのです」

「……………いいでしょう。ならば、気のすむまで調べてみなさい」

こうして剣持はただ一人で三年前の女子高生遺棄事件を調べ始めたのだった。



毒島陸がその奇妙な面会者に会うことにしたのは、少年刑務所を出る前に犯人役を押し付ける男の顔をもう一度見ておこうと思ったからであるのと、自分を捕まえた刑事が三年近くも経って面会に来たことに興味も引かれたからであった。

「なんの用だよ、刑事さん」

面会室に先に入って席に座って待っていた、記憶に焼き付いたスーツ姿の剣持の前の席に行儀悪くドスンと音を立てて座る。

怒りを誘う為になぎと行儀悪くしたというのに剣持は機嫌を害した様子も無く、ただ真っ直ぐに毒島を見て来る。

「……………おい、何を黙り込んでんだよ。俺に会いに来たんなら話したいことの二つや三つあるんだろ」



何も言おうとしない剣持に先に痺れを切らした毒島が悪ぶって聞く。

悪態を尽いて剣持を怒らせるのは少年刑務所を出てからの予定で、剣持が今の段階で面会にやってくるなど予想外に過ぎる。

牧師に与えられた計画通りに動くにはまだ早すぎるので、さっさと帰ってもらおうとしたのだ。

「すまなかった」

また罵倒の一つや二つでも出て来るのか、被害者である十神への謝罪の言葉でも要求するのかと思ったら、剣持は前の机に手を付いて深々と頭を下げて謝罪をしてきた。

「は？　おい、何をいきなり……」

「これを覚えているか？」

何故剣持が謝るのか理解できない毒島の前に、剣持がスーツの内ポケットからとある物を取り出して机に置く。

「これは十神が握っていたストラップ……」

「ご遺族から借りて来た」

そう、十神まりなが死んでも離さなかった毒島を告発する為の物。

憎んでいるのか、恨んでいるのか、蔑んでいるのか、如何にしても良く思っていない証明でもあるストラップを前にして毒島に言えることはない。

「こんな物を持ち出して、今更なんのつもりだよ。はっ、もっと苦しめってか」

毒島は剣持が自分を苦しめる為だけにわざわざ遺族から借りてきたと思った。だが、実際は違う。

「違う。俺は三年前の事件を再捜査していた。その過程でご遺族に許可を貰ってこのストラップにも触ることが出来たんだが」

そうやって剣持はストラップを手にとって、ストラップの人形の首の部分を軽く潰して毒島に近づける。

『あたしがこのまま殺されちゃった時の為に、このメッセージを残します』

「こ、これは……っ!？」

ストラップの人形から毒島でも剣持でもない。第三者の声が聞こえて来た。

「聞け」

聞き間違えるはずがない。だけど、そんなはずがないと思いながらも剣持に言われて耳を澄ませる。

『ここは毒島君の部屋ですけど、彼は一度も来ていません』

もう二度と聞くことはないと思った声だった。その声が事件の真相を告白する。

『理由は分からないけど、彼の二人の友達がこの部屋を乗っ取ってあたしに酷いことを……』

「十神……」

『でも、毒島君は関係ありません』

「十神……っ！」

偽りなどあるはずのない事件の被害者である十神まりなが残したメッセージに毒島は信じられない思いで一杯だった。

「その様子では知らなかったようだな。このストラップに録音機能があつたことに」

剣持もまた溢れ出る感情を抑えるようにして平坦な声で告げる。

「十神はあんな地獄みたいな状況にありながらもお前のことを心配して、こんなメッセージを残していた。話してくれるか、全ての真実を」  
「ああ……」

溢れ出る涙を拭うこともせず、流れるままに任せていた毒島は殺人計画のことも忘れて自らが見聞きして来た全てを語り始めた。



毒島が少年刑務所を出たのは、剣持との面会からそう期間が開いたわけではない。

元より真実が白日の下に晒されても毒島は刑期を終えるまで少年刑務所を出ることを望まなかった。

流されて騙された上に十神まりなの死体遺棄を手伝ってしまったことは事実。

贖罪の念があつた以上は改悛の情があるからといって、少年刑務所を直ぐに出るのは毒島の気持ちに許さなかった。

「このことも、遂におさらばか」

とはいえ、毒島の刑期はたった三年。されど三年。

17歳からの最も多感な時期を少年刑務所を過ごした毒島は刑期を終えて出所し、外から見上げた太陽に眩しさを覚えて腕で影を作る。

「これからどうつすかな」

もう真実を明らかにしてくれた剣持を犯人役にした犯罪計画を実行に移す気は無い。

少年刑務所に入って直ぐに毒島が出した告白文を握り潰していたのは剣持ではなく、弁護士の湖森であつたことも分かつたので恨む気はもうない。

告白文を握り潰した湖森にしても、娘の病気の弱みがあつて多間木父子を庇っていた娘は治療の甲斐なく死去していて結果的に助からなかった失意から揉み消したまま放置してしまつたと本人から謝罪と共に聞いた。

仮に湖森が剣持に真相を告発する手紙を送つたとしても、剣持がストラップの録音機能に気づくか、多間木や魚崎が真実を喋り出さない限り、状況は変わらなかつただろう。

今になって思い返せば、告白文を読んだとしても犯人同士が責任のなすりつけ合いをしていると見るのが普通だろう。第一、依頼者を売

る行為は弁護士として違法行為になるので湖森を恨む気も無い。

「十神の線香を上げに……流石に遺族が許してくれないか」

裁判の時に自身に向けられた十神まりなの妹らしき少女からの憎しみの目を思い出し、幾ら死体遺棄以外には関わっていないとしても軽々と家に訪れることを許してはくれないだろう。

「君が毒島陸君だね」

「ん？」

目的地も決めずに歩き出すと、前からやってきたくたびれたスーツを着た見覚えのない男が話しかけて来た。

「アンタは？」

「僕はこういう者でね」

「……………記者さんかよ」

誰なのかと聞くと男がスーツから名刺を差し出して来るので受け取って見ると、そこには三年間世間から隔離されていた毒島も知っている大手出版社の名前が印字されていた。

「で、記者さんが俺に何の用で？」

今更、大手出版社の記者が毒島に何の用があるのかと聞く。

「実は僕はサツ担、まあ所謂、警察担当記者でね。捜査一課の剣持警部が独自に動いていることに勘づいている記者は多いよ」

何が言いたいのか良く分かっていない毒島に記者の男は似合っても無いウインクをして笑った。

「担当直入に言おう、三年前の女子高生遺棄事件の告白記事を出す気はないかい」

それを聞いた瞬間、毒島の中で悪魔が囁いた。

（そうだ。何も十神にやったことと同じことで二人を殺す必要はない）

牧師より与えられた犯罪計画は毒島が墓の下まで持って行くことになるだろう。

（俺は多間木と魚崎の死刑執行人としてサインするだけだ）

命ではなく社会的な死を意味するのだとしても、生きている方がより苦しむことになるかと悟った毒島は笑った。

「いいよ。で、なにすんの？」

「よろしく頼むよ。立ち話もなんだから向こうのカフェで話そうか」

記者の男は何も気づかぬままに二人の男の死刑執行の片棒を担がされることにも気づかぬまま、先に歩き始めたのだった。

## 雪影村殺人事件

「嬉しい涙だったはずが許されない色だったなんて……」

自室の机に向き直りながら葉多野春奈は涙ながらに文を書いていった。

「もうだめ、死ぬしかない」

知られば許されるはずがない。そう思うと便箋に涙がポツポツと落ちる。

「どうして、どうしてなのお父さん？」

それ以上、何も書けなくて鉛筆を置く。

これは遺書になるかもしれない。自分が死ねば家族や多くの人が見るだろうから詳しい思いを書けない。もしも全ての真実が明らかになれば、自分だけではなく家族や島津の家にも迷惑をかけてしまうから。

自分は生きてはいけけないのだ。誰にも知られずに子供を墮ろすことは、こんな小さな村で出来るはずもない。

仮に他の場所に行くとしても未成年である以上、親の承諾なしに墮胎手術を受けられないだろう。大体、高校生の春奈にそんなお金は無い。

どうしようもないのだ。全ての秘密を隠したままにするには春奈が死ぬしかない。

「春奈」

「!？」

せめて誰の迷惑にならないように海岸で死ぬしかないと覚悟を決めていると、部屋の外から自分を呼ぶ母の声と共にドアが開かれて肩をビクリと震わせた。

「な、なに？」

振り返って平静を装いながら、驚きと申し訳なさが無い交ぜになって聞き返す声が震える。

「アンタに電話」

「こんな時間に?」

「そうよ」

言われて部屋の時計を見ると、もう夜の九時を回っていた。

こんな時間に春奈に電話するとしたら、一時間前に訪れた島津の家から勝手にいなくなったことを不審に思ったのだろうか椅子から立ち上がった。

「誰から?」

と言いつつも、匠と付き合い出してから冬美や綾花とは付き合いが遠のいている。ならば、都だろうかと考えたが彼女の性格ならば急ぎの用があるなら直接に家に来ているし、急ぎでないならば明日学校で言おうとするだろう。

「金田一君って覚えてる? ほら、五年前に村に二週間だけいた」  
「え?」

母のまさかの人物の名前に記憶野が刺激される。

たった二週間だけしか村にいなかったけど、タイムカプセルを一緒に埋めるほどに仲良くなった男の子。

『———こんな寂しいところで、君はなんで絵を書いているんだい?』  
無口で回りから一歩離れていた自分にも声をかけてくれた金田一のことは容易に思い出せた。

「どうして……」

「さあ? 待つてもらってるから早く出なさいよ」

春奈が窮していることに気付いた風も無く、言い捨てた母の姿がドアの向こうへと消えて行く。

この五年間、年賀ハガキを送っても一度も返事が返ってくることはなかったのに、どうして今になって電話がかかってくるのか分からない。

「金田一君、か」

分からないが、母のあの様子では自分が電話に出るしかないだろう。

立ち上がって部屋から出て、電話が置かれている一階の廊下を下り

る。

「どうしたんだろう」

言いつつも、もう春奈は死を覚悟しているのだ。

脇に置かれたままの受話器を手にとって耳に当て、保留音が鳴っているのを確認してボタンを押して止める。

「……………もしもし」

『おっ、春奈か』

応答すると電話の向こうから、記憶にあるよりも少し低くなったような金田一の声が耳に届く。

『俺、金田一一。五年前に二週間だけ雪影村にいたんだけど、覚えてるか？』

あれほど印象深い人を忘れるはずがない。

「うん、覚えてる。久しぶり、金田一君」

殆ど村から出ることが無いので人見知りな方の春奈でも肩から力を抜いて話をする事が出来た。

『いやあ、忘れられてなくて良かったよ』

「それはこっちもだよ。年賀ハガキを送っても返事を送ってくれないし、私達のことなんてもう忘れちゃってるって思ってた」

少しの恨みを込めて電話の向こうで覚えててもらって安堵している様子の金田一に向かって言うと、「たはは」と笑って誤魔化す空気を感じ取る。

『悪い悪い。気にはしてたんだけど、究極の筆ブショーでさ』

「金田一君らしいね」

『だろう』

真面目とは言い難いが人を和ませる空気を纏った金田一との付き合いはたった二週間と短い、あの日々は春奈にとっても大切なものだった。

「それで急にどうしたの？ こんな遅い時間に電話してきて」

死を覚悟した日に何年も音沙汰が無かった友人から電話がかかってくるなんてタイミングが良すぎる。

もしかしたら匠が金田一に連絡したのかもしれないなんて、そんな



あるはずもない希望は抱かなかった。春奈はもう絶望しきっていたから。

『用件っていうほどじゃないな』

やっぱりそうだ。希望なんて抱く方がより絶望が深くなる。

『ちよつと思うところがあつてさ。知り合い全員に連絡してるんだ』

そこで金田一は一度間を置く。

『で、春奈が送ってくれた年賀ハガキに電話番号が書いてあったから電話したってわけ』

「良く分からないんだけど」

『大した理由があるわけじゃなくて』

言い淀む気配を電話口から感じる。

『ちよつと前に知り合いが怨恨で人を殺そうと計画してたことがあつて』

「え!?!」

直接的に電話してきた理由とどう繋がるのかは分からないが、十分に大した理由に子機を持つ春奈の手がビクリと震えた。

『そいつは計画するだけで終わって実行に移すことはなかったけど、色々思うところがあつて知り合いみんなに連絡してるんだ』

「思うところって?」

『人はこれしかないと思ひ込むと一直線になっちまうってこと』

ギクリと春奈は身を固くした。

金田一が春奈が自殺するしかないと思ひ詰めていることを知らないはずである。

『天草財宝のことって知ってるか?』

「う、うん、一枚一億円もする天正菱大判が見つかったってニュースを見たから」

話が変わったかとも思ったが関係することなのだろう。続きを待つ。

『あれを見つけたの俺達なんだよ』

一瞬、春奈は自分の耳を疑った。

「え、あの、一億円もするやつを金田一君が?」

『ああ、まあ、それはどうでもいいんだけど』

『どうでもよくなかないよ……』

一億円なんて文字にすればたった三文字に過ぎなくとも一般的なサラリーマンが定年まで働いた収入の半分に値する金額である。

金田一の言葉からするに一人で見つけたわけではないようなので、分け前を分担するにしても高校生が得るには大金には違いない。

『話の趣旨はそこじゃないからいいんだよ』

金田一と話していると自殺を考えていた春奈の心は上へ行ったり下に行ったりして落ち着くことが無い。

『天草財宝探索のツアーを計画していた人の娘さんが重病でさ。渡米しないと治療が出来ないってんでツアーに参加していた人達の殺害計画を練ってたんだ』

『待つて』

これには春奈も思わず止めに入らずにはいられなかった。

『悪い悪い、ちよつと端折り過ぎたな。ツアーの参加者つてのは実は今は潰れた蔵元コンツェルンの社長の蔵元醍醐が出した養子で、ツアーを計画していた人の奥さんもそうだったんだって』

上がって下がって、また上がる。乱高下は止まらない。

『蔵元醍醐は自分の実子以外には例え孫であっても財産を相続させないって遺言を残してて、蔵元醍醐の娘である奥さんは亡くなってたから他の子供を全員を殺せば遺産を手に入れることが出来て娘を助けられるって考えたんだと』

『で、でも、確か蔵元コンツェルンって……』

『多額の負債を抱えて倒産した。俺達がそれを知ったのは天正菱大判を見つけた後だったよ』

仮に実子を皆殺しにしても遺産が転がり込むことはない。

『さつき言つてたのとは別の知り合いに紹介されてツアーを計画した人に会った時、その少し前に知り合いの件があったから何気なく聞いてみたんだよ。「何か切羽詰った困ったことはありませんか？」って』  
話がここに来て繋がってくる。

『最初はなんもないって話だったけど、その知り合いの件のことを出

したらちよつと動揺したみたいだから突っついてみたら娘さんの治療費が必要なんだってゲロツた』

「ゲロったって……」

電話口の向こうで、何時かのような金田一の忍び笑いが聞こえる。

この様子からしてかなり積極的に、かつ強引にことを進めた感じがアリアリと伝わってくる。

「かなり無茶したんじゃないの?」

『いや、後で感謝されまくったぞ。ツアーの参加者達に彼らにとつて姪に当たる子を助ける為に遺産を分けてほしいって頼んだら、話が呑み込めずに保留って人が大半だったけど即答でOKの返事をしてくれた人もいたし。まあ、お宝捜索中に蔵元コンツェルンが倒産したってニュースが流れた時は見ていられなかったけど、運良く天正菱大判が見つかって本当に良かった良かった』

結果良ければ全て良しではないが、誰も傷つくことなく大団円を迎えられたのならばそれほど良い結末はない。

『で、だ。そんなことがあってから知り合いやら昔の知り合いに聞きまくってんだ——春奈』

本題に入る宣言するかのよう金田一の声が静謐に春奈の名を呼ぶ。

『何か切羽詰ったことはないか?』

その問いに春奈は——。



「で、どうなったんだ？」

不動高校のミステリー研究会の部室にて千家貴司に事のあらましを説明していた金田一は机に頬杖を付く。

「島津っていうタイムカプセルを埋めた仲間の一人と付き合ってた子供が出来たんだと」

「そいつらって俺達とタメだろ？ 高校生にしちゃ早すぎないか」「だよな」

それに関しては金田一も思ったことである。というか、正直言えば羨ましいと思った。いや、子供を作ったことではなく作るための行為にだが。

「問題は、島津と春奈の父親が同じ名前だったんだよ。そしてそのことを島津のことが好きだった奴が冗談で同一人物だって嘘ついちゃったことにある」

「あ、ああ〜」

そこまで聞いて千家にも金田一がどうして疲れた顔をしたのかが分かった。

「自分達は兄妹だって勘違いしちゃったわけか」

千家もその流れならば勘違いしても無理はないと思ったが腑に落ちないこともあった。

「でも、昔から付き合いがあったんなら父親が別人だって気づかないか？」

「それがさ」

金田一は雪影村で聞いた話を思い出す。

「二人の家は時期は違うけど随分昔に両親が離婚してて母子家庭だったんだ。春奈は自分の父親には偶に会っていたけど、島津の父親に会ったことがあったとしてもガキの頃で顔も覚えてなかったんだろう。で、友達の話を受けて確認する為に島津のアルバムを見たら、近所付き合いしてた春奈の親父さんが赤ん坊の島津を抱えている写真があったのを見ちゃったんだと」

金田一の説明を聞いた千家の顔が言葉よりも雄弁に、これはあかん

と物語っていた。

「間の悪いことに、妊娠検査薬で妊娠の反応が出たところだったから、春奈は自分が実の兄の子供を孕んでしまったと追い詰められた」

端的に言えば間が悪すぎた。その言葉に尽きる。

「島津曰く、母親は俺の映っている写真はなんでもって感じてアルバムに入れてたらしい。あの地方には今井って苗字は多いらしくて、島津の父親も隣町に住んでいて春奈の父親とは別人だったよ」

「なんつうか……」

それ以上の言葉を発することも出来ず、千家は大きな溜息を漏らした。

「電話で春奈から涙ながらの事情を聞いて、これは直に会って話をしないと思って思ったわけよ。でも、東京から秋田まで遠すぎるからお袋に金を貸してくれて頼んだんだ。春奈に自殺を強行しないようにお袋に電話を変わってもらってその間に電車でもタクシーでも使って行くつもりだったんだけど」

仕事から帰って来た父親に風呂上がりの一杯を提供しようとしていた金田一母は話を聞くなり激昂した。

春奈ではなく、金田一に。

「時間も時間だから電車を使うと遅すぎるから、親父と俺を車に押し込んで送り出した後は春奈の母親を電話口呼び出したりしたらしい。雪影村に住んでいる親友にも連絡して春奈の家に行かせたりして、俺と親父が春奈の家に着いた頃には関係者同士が集まったの話し合いが殆ど終わってた」

「おばさん行動力ありすぎだろ」

小学生の頃から金田一と付き合いがある千家も家に行った際に会ったことはあるが、まさかの決断力と行動力に脱帽するばかりである。

「終わってみれば春奈の独り相撲ってことで終わったんだけど、島津がそりゃあもう怒っててさ」

翌朝近くになって雪影村に到着した金田一は遠い目をする。

「下手をすればその春奈ちゃんは自殺して、お腹の子も一緒に死んで

たところだったからなあ」

貶める悪意はなかったとしても、まだ傷が完全に癒えていない千家からしても許し難いと思ってしまう気持ちがあるので怒ったという島津の気持ちに共感できる。

「嘘を言った二人にしても春奈が妊娠していることは知らなかったっていうのも大きいぞ。普通なら父親のことなんて母親にでも聞けば直ぐに分かることだから、まさか自殺を考えるなんて予想もしていなかったと」

ほんの小さなすれ違いや勘違いで、取り返しのつかないことになるところであった。

「最後は島津が春奈にプロポーズして、春奈も受けてめでたしめでたし。俺も学校あるから埋めたタイムカプセルを掘り出して笑い合つて、全部丸く収まってハッピーエンドだ」

東京と秋田の往復は疲れたが、それだけの甲斐はあったと金田一は笑っていた。

「流石は金田一。名探偵の孫にして自身も名探偵と呼ばれていることはあるな」

「止めろよ」

「いいじゃないか。事件が始まる前に終わらせる探偵なんて金田一ぐらいだろうぜ」

諸手を上げて褒められた金田一は苦笑のみを千家に返し、椅子に深く凭れる。

「千家のお蔭だよ」

「俺の？」

自覚のない千家に金田一は淡く微笑む。

「千家が俺に言ったんだぞ。『俺みたいに抱え込んでいる奴がきつといるから突っ込んで聞いてみる。俺のことを話しても構わないから』って」

「ああ、そーいや言ったな」

「自覚なしか」

本当に忘れていたらしい千家に呆れつつも、彼の言葉を受けた金田

一は会う人・昔の知り合いなどに切羽詰った悩みはないかと聞くようになったのだ。

「天草財宝の和田さんとかもそうだったし、結構みんな自分じゃどうしようもない悩みを抱えている人は多い」

中にはそこまでの悩みを抱えていなくて怒られたり嫌われたりすることも少なくはなかったけど、金田一は聞いたこと自体に後悔は全くしていなかった。

「追い詰められちゃうと、こうしかないっていう思い込みしてしまうからな。難解だと思ったら人に話してみたら簡単に答えが見つかることもある」

実際に殺害計画に全霊を注いでた千家は苦い表情で彼らのその時の気持ち理解できてしまう。

「他にも多くの人がそうなっていると思うとやるせないな」

「じゃあさ、俺が解決するよ」

え、と千家が自分と同じ思いを抱いているであろう人達のことについてを馳せていると金田一が言った。

「俺は名探偵なんて呼ばれたくないけどさ、犯罪を犯すのを事前に止めることが出来ればそう呼ばれてもいいかもしれないな」

金田一が知る犯人の犯行動機は、殆どの場合が加害者に対する怨恨からくるパターンが多い。勿論、例外はあるが同情の余地が大いにあり、彼らの犯罪を暴いたことを褒められても嬉しくないから名探偵と呼ばれることを好まず、事件を解決しても警察には金田一のことを伏せてもらっていた。

「俺の経験上、殺人ってのはやり場のない苦悩に追い詰められた人間が悪魔の囁きに耳を傾けて行う大きな賭けだ。でも、殺人を犯しても報われることはない。殺人を犯していたことが判明しても生きて償えば人生はやり直せるけど、殺人を犯さずに解決できたならこれ以上のことはないだろ」

多くの殺人事件に遭遇し、解決して来た金田一の信条であり、千家の事件に立ち向かって春奈の一件に関わったことで、誰も死なず傷つかずに事件が始まる前に解決できることを知った。

「いいな、それ」

千家は金田一の言葉を聞いて嬉し気に笑った。

「事件を事件になる前に解決する探偵。そうなったら名探偵・金田一耕助も超えるんじゃないか」

「ジツチャンを超えるか、考えたこともないけど悪くない」

新しい着眼点に金田一は目を丸くし、相好を崩すように微笑んだ。

「俺も手伝うからやってみろよ、金田一」

ここから金田一耕助の孫としてではなく、金田一一としての旅が始まる。

「そういや、今度いつきさん結婚するんだってな」

天草財宝の一件で再会した元カノの最上葉月とヨリを戻したが、穂を養っていることを知られた際にトントン拍子で話が進んでしまったらしいことを千家はいつき本人から聞いていた。

「いつきさん許すまじいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

放課後の不動高校に金田一のシャウトが木霊する。



## 狐火流し殺人事件

神小路陸は小学五年生の夏に訪れた村に向かう為に最寄りの駅で電車を降り、ホームの階段を上って改札に向かっていた。

「白狐村、か」

知らなければならぬことがあった。聞かなければならぬことがあった。

「しかし、なんで茉莉香と凜の住所が一緒なんだ？ まあ、手っ取り早くていいけど」

白狐村を訪れる切っ掛けとなった年賀状二枚に書かれた同じ住所に首を捻る。

「この二人なら俺らが川を下ってる時、キャンプに残ってたから何か知ってるかもしれない」

六年前のあの夏に陸の水筒に入れられた蜂。

キャンプを閉めてあったのだから自然に入るはずがない。人為的なものであれば、陸が金田一と鐘本あかりと川下りをしている間にキャンプに置きっぱなしになっていた時に入れられた可能性が高い。

だとすれば、共に川下りをしていた金田一とあかりは外すとなると、残った面子の中で同じ住所である茉莉香と凜の下を訪れるのが二人一度に会えて一番手っ取り早い。

「……………もしかして陸、神小路陸か？」

改札を抜けて駅構内の地図を見上げてバス乗り場を探していた陸は名前を呼びかけられて振り返る。

そこにはスーツを着た知らない男が立っていた。

「えっと、確かに俺は神小路陸だけど、そちらはどちらさんで？」

「おいおい、何言ってるんだよ、俺だって」

とスーツを着た男に妙に親し気に言われても陸には相手が誰だか分からない。

「金田一だよ、金田一一。小五の夏にカブスカウトで一緒に遭難した

仲じゃないか」

「なにっ!? 金田一だっつて!？」

確かに言われてみれば当時の頃の面影があるが、正直に言えばスーツの男を年上と見ていた陸は金田一と聞いて目を剥いた。

「う、嘘だ!？」 金田一はもっと軽そうな顔してるぞ!」

記憶にある金田一との明確な違いのある細くなった眉と知的に見える眼鏡を指差しながら陸は叫んだ。

「どんな顔だよ」

金田一はそう言いつつも満更でもなさそうな顔でニヒルに笑う。

「あれ以来会ってないし、六年振りか。陸は人相悪くなったよな。髪まで刈り上げてよ」

「ほっとけ」

不良仲間に付き合ったりしてガラが悪くなった自覚があるだけに陸は抗弁できずに顔を逸らした。

「金田一もこんな田舎に来たってことは目的地は白狐村か?」

「そうだよ。陸もだろ」

「ああ」

目的地が同じということでもバス乗り場に連れられて歩き出す。

「眼鏡かけてるってことは目、悪くなったのか?」

「いや、これは度が入ってないんだ」

「じゃあ、伊達眼鏡か。しかし、なんでまた」

「カツコつけ」

マジか、と伊達眼鏡をクイクイとしている金田一に中身はあまり変わっていないようで陸も安心した。

「なんだそりゃ」

「これが結構切実でさ。人間、初対面の印象って見た目が大きいだろ。信用されるためにはそれなりじゃないと駄目だっつて痛感したんだ」

「……………流石、東京。シビアなんだな」

陸が住んでいるところは田舎というわけではないが、流行の発信地でもある東京は考え方からして違々と痛感する。

「東京とは関係ないぞ」

「へ？」

「少し前に探偵事務所を開設したんだ。高校生だってんで舐められるのは仕方ないけど、見た目ぐらいはちゃんとしないとってアドバイスされてさ。どうだ、少しは頭良さそうに見えるか？」

「そこで、ふざけてなければ多少は頭も良く見えたんだけどな」

眼鏡をクイクイとしている姿はそうでもないが、初対面でのイメージでは確かに社会人に見えたことは陸の心の奥底に押し込める。

「でも、探偵になったってのは少し納得したよ。お前、殺虫スプレーで火炎放射器みたいなのを即席で作ったり、ペットボトルで即席の救命胴衣を作ったり、頭の回転早かったもんな」

バス乗り場に到着して、時刻表を見れば白狐村に向かうバスが来るには少し時間がある。

「探偵になったってことは高校辞めたのか？」

「高校通いながらやってる。まあ、探偵って言っても依頼は殆どないけどな！」

ベンチに腰かけて笑う金田一は六年前と少し変わったけど、変わっていないところもあって陸も少し笑う。

「それって高校の制服じゃなくてスーツだろ。白狐村には探偵の仕事で来たのか？」

やがてやってきたバスに乗り込んで、最後尾の席に並んで座りながら気になっていたことを金田一に聞く。

「違う違う。ほら、カブスカウトの奴らに連絡を取りたいんだけど、住所だけで電話番号とかは分からなくてさ。凜のお父さんがキャンプ場に俺達を案内してくれただろ。もしかしたら他の奴らの連絡先を知ってるんじゃないかと思って来たわけ」

陸にも連絡取りたかったんだよ、と言う金田一の目的が分からなくて陸は眉を顰めた。

「仕事じゃないんなら美咲とかの女連中に粉かけんのか？ 流石は東京人、やることが壮大だねえ」

「茶化すなよ。違うっての」

こんなことを言うからクセのある性格だなどと噂されてしまうの

だが、陸には変えようがない。

「俺が探偵事務所を開設したのは、事件を起こる前に解決するのが目的なんだ」

ガタンと舗装がしつかりとされていないのか、バスが一際大きく跳ねた。

「え、なんだって?」

「だから、事件が起こる前に解決する為に白狐村に来たんだよ」

全く以て意味が分からない。

「普通は分からないよな」

陸の心の声が顔にも分かりやすく出ていたのであろう。似たような反応を今まで何度も見てきたのか金田一は苦笑するだけで流す。

「金田一耕助って知ってるか?」

「あの有名な名探偵だろ。話だけなら耳にしたことが」

そこで陸は言葉を止めて金田一の横顔を見る。

「金田一一と金田一耕助………もしかして親戚か?」

「俺の爺ちゃん」

この日、何度目かも分からない驚きが陸を襲う。

「……マジ?」

「嘘ついてもしかやあないだろ」

「いや、まあ、そうなんだけどさ」

金田一が嘘を吐く理由も無いので、六年前の頭の回転の速さや妙な知識も金田一耕助の孫と聞いてしまつては寧ろ腑に落ちてしまった。

「ジツチャン譲りなのか、俺も昔から事件に巻き込まれることが多い。事件を解決することも多かつたんだ」

そこで一度、間を置いた金田一は淡く微笑んだ。

「で、昔からの知り合いや出会った人の中には、切羽詰って人を殺さないと追いつめられてた人も少ないながらもいたわけだよ」

重くなった話に不良とつるんでいても一般人に過ぎない陸には何も言えない。

「そういう人達って一人でこれしかないと思い込んで犯行に及んじまうんだ。その前に誰かに相談できていたら別の道を選べたかもし

れないってことは何度も思った」

窓の外を生き茂る木の葉が太陽の光を覆い隠し、陸にはその時の金田一がどのような表情を浮かべていたのかは分からなかった。

「ちよつと前に五年前の知り合いに電話したら自殺する間際でさ。その理由は結局、すれ違いや勘違いだったことは分かっただけけど、他にも同じように思いつめている人を助けることは出来ないかと思つて探偵事務所を開設したんだ。昔の知り合いに連絡を取ろうとしているのもその一環」

木の葉の群れを通過して太陽の光が金田一の向こう側から照らし出す。

「陸は何か困ったこととかないか？ 今なら特別料金で依頼を受け付けるぞ」

幻想と現実を行き来して感覚が麻痺した陸は、まるで何かに導かれるように口を開く。



月江茉莉香は突如として白狐村を訪れて来た金田一と陸を自宅に招き入れた。

「どうしたのよ、金田一。わざわざ改まってさ」

金田一の変化に驚きつつも、何故か金田一の要請で凜と共に和室で向かい合うこの状況に頭を傾けた。

「陸はっ？」

「ちよつと席を外してもらつてる」

眉毛が細くなつていたりことや伊達眼鏡をしていること、高校生なのにスーツを着ていること以上に固い表情を浮かべている金田一に眉を顰めた茉莉香は凜と顔を合わせる。

「二人に大事な話があるんだ」

もしかして自分達のどちらかに告白を申し込みに来たか、と凜とアイコンタクトを交わす。

剽軽とまではいなくても、金田一は真面目というよりは軽い雰囲気だったと記憶していた茉莉香は見た目を整えてスーツまで来て、大事な話があるなどと言われれば年頃の少女としてはそんな勘違いをしてもおかしくはない。

「六年前のこと、覚えてるか？」

「あの遭難事件のこと？ 忘れるわけじゃないじゃない」

子供心にも大きな事件だったが、大変だったかもしれないが良い思い出で一杯だったから二人も良く覚えていた。

「その時のことで二人に聞きたいことがあるんだ」

しかし、金田一は二人と違って苦み走った表情を浮かべて、可能な限り感情を抑えているような声で問いかける。

「俺と陸とあかりが川下りした後、二人はキャンプに残ってたよな。」

その時、誰かスズメバチを捕ってなかったか？」

「もしかして陸がチクつたの？」

「いいから答えてくれ」

一緒に来たらしい陸が話したのは間違いないと、ムツと眉を顰めた茉莉香だったが金田一が強い口調で返答を求める姿勢に気圧された。

「……………分かったわよ」

友達に代わりに追及させようとするなど、やはり陸は陰険だと決めつけて口を開く。

「三人がいなくなつた後、キャンプの近くに迷い蜂がいて危なかったから光太郎が罾を張って捕まえたのよ。あの時、陸って一人だけ靴紐貸さなかったじゃない。だから、セコイ陸をビビらせる為に私と凜、光太郎で蜂を陸の水筒に入れたわ」

「……………そうか」

「死んだ蜂が水筒に入ってたって陸が金田一に言ったんでしょ。自分が言えないからって金田一に言わせるなんて靴紐の時と何も変わってない。やっぱインケンだわ。どうせ、そっちの部屋とかで聞いているんじゃないの?」

「茉莉香、ちよつと」

「ん、分かっているわよ、凜。まあ、蜂を入れたことはやりすぎだって思ってたから、ちゃんと陸に謝るわよ」

茉莉香にとつても凜にとつても、そして蜂を捕まえた光太郎の三人は悪意はあれど、陸を明確に傷つけたい、害したいというものではなかった。

精々が死んだ蜂に驚いた程度だろうと、だからこそ茉莉香も凜も謝れば済む問題だと思っていた。

金田一は真実を告げるべきなのかと逡巡した。

陸から聞いたこと、茉莉香から聞いたことを合わせれば全体像が見えて来る。それを分かった上で茉莉香と凜に真実を突きつけるべきかと金田一は迷った。

「どうしたのよ、金田一?」

言うべきなのかと迷う金田一に茉莉香が聞く。

言えるのか、三人の行為によつて陸の母が死に、陸の人生が捻じ曲げられたなどと。

茉莉香と凜の人生に暗い影を落としかねない行動に出られない金田一が迷っている間に、和室の襖が勢いよく開かれた。

「——謝って済む問題かよ!」

陸が襖をパンと力任せに開き、和室に一步入って叫んだ。

「な、なによ大声なんてだしちやつて」

「蜂は死んでなんかいなかった!」

それを聞いた茉莉香と凜は目を見開く。

「お前らの所為で母さんは……………!」

「陸君……………」

怒りそのままの眼光で畳に座る茉莉香と凜を睨み付ける陸はそれ以上の言葉を続けることが出来なくて、金田一に頼まれて陸を見張っていた茉莉香と凜の父が和室から離れるように促す。

去って行く二人の背中を彫像のように固まっただけに見送ることしか出来なかった茉莉香は、全てを知っているであろう金田一を見る。

「金田一、陸のお母さんに何があったの？」

聞きたいけれど、あの陸の様子からして聞きたくないという気持ちがあったけれど、あの悪戯を主導した者として茉莉香には聞く責任があった。

「陸のお母さんは水筒に入っていた蜂に刺されたらしい」

もう隠すことに意味はないかもしれないけれど、叶うならば金田一は話したくはなかった。

真実は高校生が背負うにはあまりにも重すぎるから、それ以上、金田一は何を聞かれても言えなくて口を閉じ続けた。



「ごめん、陸。あの二人にはあれ以上、言えなかった」

あの後直ぐ居た堪れなくなつて茉莉香達の家を出た金田一は、白狐村を出ようとバスに乗り込んでいた陸に追いつき、駅のホームで謝った。

「……………いいさ。俺が知りたかったのは真実だから」

金田一と顔を合わさないように遠くを見つめている陸は空っぽの



声で言った。

「ごめん」

「だから、お前が謝る必要はねえって」

それでも金田一は謝らずにはいられない。

「あの時、俺がペットボトルと靴紐を使って救命胴衣を作ろうなんて言わなけりゃ」

「金田一が悪い事したわけじゃねえだろ」

と言いつつ、新幹線がホームを過ぎ去っていく風に髪を揺らす陸は目を細める。

「俺だって幾ら母さんが無理して買ってくれた靴だからって拘らずに靴紐を貸せば良かったんだ。貸せないにしても意地を張らずに理由を話すなりすれば」

彼らは子供だった。未熟で短慮で思慮が足りない子供だったのだ。

今ならば別の方法を容易く思いつくほど、あの頃の自分達はどうしようもないほどに子供だった。

「母さんが死んで、父さんも俺が蜂を入れたんだと誤解したまま死んだ。アイツらの所為で俺の人生は滅茶苦茶だ」

両親が残してくれた生命保険とマンションのお蔭で高校に通って普通に生活できているが、家に帰ってもお帰りと迎え入れてくれる陸の家族は誰もいない。

「でもさ、それでもカブスカウトに参加したことを間違いだったとは思えないんだ」

「え？」

あのカブスカウトが原因で陸の人生は滅茶苦茶に捻じ曲がったはずなのに、それでも陸は晴れやかに笑った。

「金田一がいてくれて良かったよ」

その笑顔を金田一の方が直視できなくて顔を逸らす。

「もし、茉莉香と二人で会っていたら、あの調子だと俺は何をやっていたか分からない」

「陸……」

「だからさ、金田一が間に入ってくれたお蔭で少しは冷静でいられた。

結局、飛び出しちまったけど、ありがとな」

感謝されるようなことではない。陸に起こった悲劇は金田一がいなければ、靴紐を求めなければ茉莉香に因縁を付けられることもなく起こらなかったのだから。

「ごめん」

「泣くなよ、金田一。俺も泣きたくなるだろうが」

金田一には謝ることしか出来なかった。

「お前の活動、俺にも手伝わせてくれよ。大したことは出来ないかもしれないけどさ」

陸の優しさが胸に痛かった。